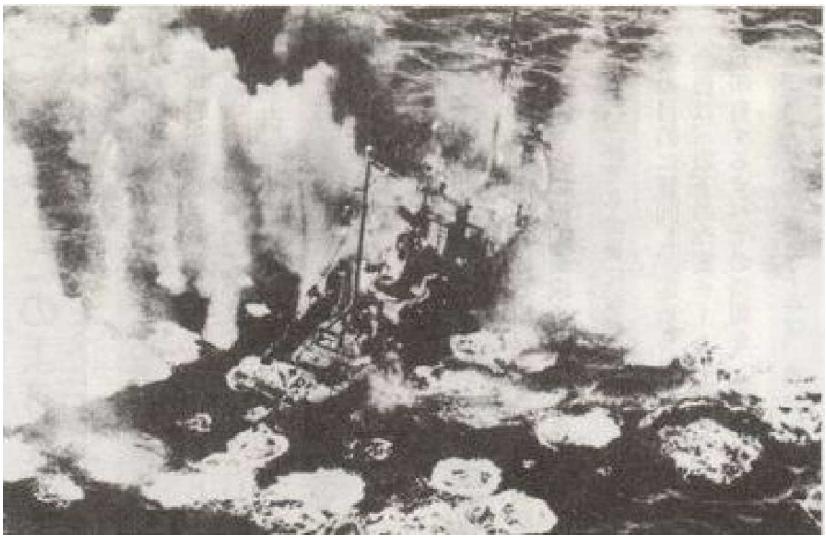
戦没船を記録する会



米艦載機の猛爆を受けて沈みつつある日本の漁船改装船（昭和17年6月ヤルート島沖）

この運動にご参加下さい

会員になって下さい・・・

写真や記録、資料を提供して下さい

「船のほかに、その墓をもたず」、アジア・太平洋の広い海域で戦死した船員は六〇、三三一人と記録されていますが、その他に多くの将兵や一般の市民が犠牲になり、この海底に眠っています。

被害船舶数は一五、五一八隻です。うち商船は二、五六八隻で、その他は漁船、機帆船などです。これら船と運命を共にした戦没船員や将兵、便乗者のことは、もはや遺族以外の誰も思い出すことはないでしょう。

戦後五〇年を迎えるにあたり、戦争を自らの手で検証しようという、いわば草の根の運動が各地で始まっています。

戦没者および船舶船員についての各種記録や証言も、関係者のご努力により多く残されています。しかし、それらは散逸し、系統だって調べることも難しいのが今日の実態ではないでしょうか。

そこで私たちは、戦時輸送船の災害を、全体として捉えるという視点に立ち、すべての資料を一堂に集め、なおかつ戦没者の墓というべき「戦没船」の銘碑を作り、後世に残したいと考えました。

もとよりこうした事業は、幅広い国民の支持、協力なしには成功しません。そのため、関心をおもちの皆様をはじめ、多くの方々のご協力を仰ぎたいと考えます。

どうか私たちの悲願にご賛同をいただき、「戦没船を記録する会」にご加入下さるよう心からお願いいたします。

一九九四年四月

戦没船を記録する会

申込み先　**戦没船を記録する会**

〒105　東京都港区芝2-8-13　睦マンション206号　船舶部員協会内

電話　03-3452-5085　　FAX　03-3452-2711

郵便振替（1995年末まで）　東京6-719515　同（今年5月以降）　00160-6-719515

会は、このような活動を致します

一、戦争で沈んだ船舶の写真を集めます

被害船舶総数は一五、五一八隻と言われています。うち一、〇〇〇隻程の写真の存在が判っていますが、なんといっても少ないですね。

戦後五〇年の歳月の重みを考えるとき、今が最後の機会だと考えました。

二、戦没船の写真を、永久祈念展示する運動を進めます

アルフォト印刷で、船舶写真、沈没海域、戦死者数など記銘し、一堂に展示する。

三、戦時記録、証言を広く集めて、整理、保管する

方々に散らばっている記録類を可能な限り集めます。そのために研究している人々との協力を求めていきます。

四、誰でも会員になれます

会の目的に賛同し、定められた会費を払っていただける方です。

会員は、以下の作業チームに参加し、共同で作業を行います。会員は、会が所有するすべての情報を、等しく受けることができます。

五、会の作業チームは、次のとおりです

会員の自由参加です。重複所属もできます。

（作業チーム）

①戦死者名簿の調査　②写真収集　③証言収集　④記録整理　⑤小型船資料調査　⑥戦史研究　⑦事業推進　⑧広報　⑨地方支部　⑩事務局

六、会費は次のとおりです

一、正会員　入会金　一、〇〇〇円　年会費　六、〇〇〇円

二、賛助会員　年会費　四、〇〇〇円

三、法人会員　一口・月額会費　五、〇〇〇円

（アルフォト写真）

はあぶる丸　石原産業　5,467総ﾄﾝ　昭和19年10月30日　比島ホロ島において空爆をうけ沈没。遭難後陸上避難、その後陸上戦闘で多数戦死した。

アルフォト写真とは

アルフォト印刷写真は、富士フィルム社が開発したアルマイトに特殊加工した印刷技術で、通常の写真に比べて、その耐久性にすぐれています。

現在は駅名板、公園の表示板、商船機械室の表示板など、多方面に亙って利用されています。

この製版により本船写真を永久に保存しようとするものであります。

会に寄せられた反響

中村隆一郎（和歌山県）

「常民の戦争と海」著者

世話人の方々の並々ならぬご努力に心から敬意を表します。戦争の記録、検証は今までライトの当て方が片寄っていたように感じます。海国日本でありながら、船と船員の姿に光を当てることが軽視されてきました。中でも無名の船員（漁民）はほとんど無視されてきたといっても過言ではありません。事実をありのままに記録し、若者に伝えていく営みは、生き残った大人たちの任務であるように思います。

素晴らしい取りくみに大いなる賛意を送ります。只、私は、遠い田舎で教職につきながらですので今まで通り、地方で生き証人からコツコツ証言を集める手法、スタンスでやっていくつもりです。得られた情報は極力提供し、ご提示いただいた作業はできる限りやらせていただきます。

次頁へつづく

民間戦没船の記録 伝える

一船ごとの記録を

戦没船の資料を収集

元船員らが組織結成

写真別枚入手、記念碑も計画

マスコミの報道から

左　読売新聞3月31日付　右　海事広報協会発行「海上の友」4月11日付

「会に寄せられた反響」　前頁からつづき

中新一郎（石川県）

読売新聞の記事を拝読しました。小生も太平洋戦争で海軍徴用船に乗り組んだ体験があり、五十年たった現在でも当時のことが頭の中に想い出されて忘れることが出来ません。私の村はこれとした産業もなく多くの若者は船員として小学校を卒えると出て行きました。太平洋戦争には沢山の方々が戦死されました。町では殉難船員の碑を建立して、海の記念日には慰霊祭を行って居りますが、年々戦争体験者も亡くなり、祖父が父がこうして戦い水漬く死となったことを知らない人達が増えて来た現状です。私も、どうかこんな時代があり、祖父が父がと忘れることのないように何かしなければならないと思って居りました。

吉田郁次郎（大田区）

私が海軍生活で体験した船団護衛において商船乗組員の非常に際しての度胸の良さと沈着ぶりは海軍々人が見習うべき点が多く、今だに家族、友人、他に語っている少年船員の行動があります。

横浜～トラック島間護衛中サイパン島近くの海域にて多くの船員、陸兵が海に投げだされました。其の際十六～十八才の紅顔の少年船員が右太股をスクリューにふれ瀕死の重傷にて漂流中本艦のボートに救出されましたが其の際に「海軍さん鱶がいるから気を付けて下さい」との言葉をかけてくれたそうで其のことが船内に伝わり乗組員全員が感動の涙にむせびました。船名及び名前、出身地が分かれば関係者に我身をかえりみず救出にいった人々を思いやるやさしい心根を伝えたく思います。少年はサイパンの病院に送るべく本艦のボートで接岸した際に出血多量で息を引取ったそうです。戦没船の参考にして戴きたくお送りいたします。

伊藤辰夫（千葉市）

私の父は伊藤幸太郎（陸軍兵士）と申しまして「原戸籍」によりますと昭和十九年七月三十一日時刻不詳、ルソン島北端沖方面に於いて戦士と記載されています。私の記憶ではその時父が乗っていた輸送船名が「ヨシノ丸」と聞いて居ます。その時代から父の乗っていた船がどんな船であったのかと現在でも時々思う事があります。「ヨシノ丸」の船長さんも同時に戦死された事を思うと心がいたみます。もし「ヨシノ丸」と言う船がわかりましたらお知らせ頂ければ幸いに存じます。

松本恵二（掛川市）

私も短期間でありますが、戦時標準型のジャカルタ丸（南洋海運）に昭和二十年三月に乗船。青島、上海と航海し揚子江呉淞附近にて機雷に触れ、応急修理を終え、終戦一ヶ月前に下関港に帰りました。当時は十五才で世間の事は分からず、戦後、色々な事を知り亡くなられた方々に心を痛める一人でございます。貴会に入会等出来ればと思っています。

会則抜粋

第一章　総則

（名称）
第一条　この会は戦没船を記録する会という。
（事務所）
第二条　事務所は東京都に置く。また、必要に応じて支部を設置することができる。
（目的）
第三条　この会は、海員と戦争とに関する調査、研究を行い、その歴史を明らかにし、かつ、調査結果を基にして、戦没船の記念銘碑を建立するなど、後世に保存することを目的とする。
（事業）
第四条　前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
一、船舶および遭難写真の収集
二、各船戦没状況、戦没者氏名の調査
三、既刊記録、出版物の収集、整理、保管、研究
四、碑建設、保存
五、広報（会報・年二回）
六、記念集会、討論集会、チャリティ、巡回展
七、ミュージアム、法人化
八、その他、必要事業
（略）

第四章　会員

（会員）
第十四条　会員は、会の目的に賛同し、事業に協力し、別に定められた会費を納入するものとする。
二、会員は正会員、法人会員、賛助会員の三種類とする。但し、法人会員、賛助会員は、総会における議決権を有しない。
三、正会員は、会の事業活動を進めるため、各運営部門に所属する。
四、会員は、会が所有する全ての情報を、等しく受けることができる。
（略）
《付則》
会費
一、正会員　入会金　一、〇〇〇円　年会費　六、〇〇〇円
二、法人会員　一口・月額　五、〇〇〇円
三、賛助会員　年会費　四、〇〇〇円

役員名簿

会長　（代行　浦田乾道）
副会長　浦田　乾道　弁護士
同　中島　洋　太平洋学会専務理事
理事　泉谷　迪　全国戦没船員遺族会副会長
同　川村　赳　外航船員医療事業団常務理事
同　小島　敦夫　海洋ジャーナリスト
同　小島　定吉　現代写真研究所事務局長
同　新藤　博志　退職船員の会横浜鷗友会会長
同　田中正八郎　元全日本海員福祉センター常務理事
常任理事　中原　厚　全国戦没船員遺族会常任理事
監事　安藤　剛夫　船員ＯＢ
同　小島　久子　税理士
顧問　大内　義夫　全日本海員組合名誉組合員
同　笹木　弘　東京商船大学名誉教授
同　田川　俊一　弁護士
事務局長　上沢　祥昭　全国戦没船員遺族会常任理事

参考図書

海なお深く

全日本海員組合編

海員組合が募集した手記一二〇篇のうち、四二篇が掲載されている。臨場感のある生々しい記録は、深い感慨を与える。遺族の手記も併載。
発行所　全日本海員福祉センター
〒１０６
東京都港区六本木七ー一五ー二六
電話　〇三ー三四七五ー五三九一

戦時船舶史

駒宮　真七郎著

太平洋戦争における、全損船舶戦史。二六二三隻、二〇〇総トン以上の鋼船の全戦争記録で、船と共に没した戦死者の数が、いたましい。
（申しこみ先）　駒宮　真七郎
〒３３０　大宮市吉野町二ー五一
電話　〇四八ー六六五ー二七〇三